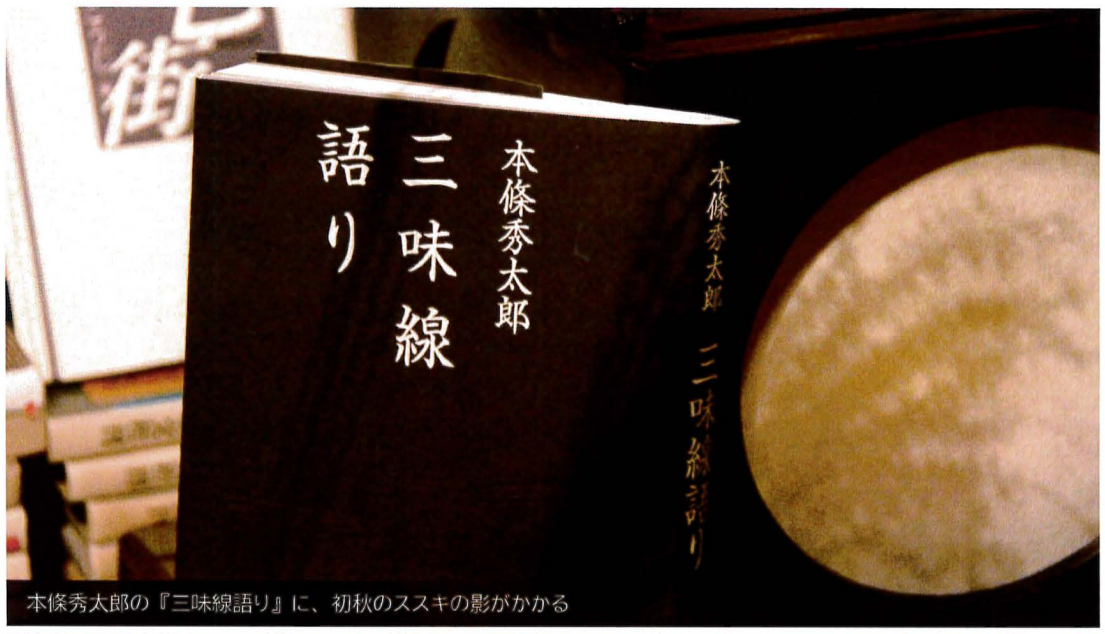
BOOKWARE 松岡正剛

vol.156

写真：小森康仁
デザイン：佐伯亮介

三味線の音楽文化が日本をおもしろくする

本條秀太郎が挑み続けている邦楽的本領



本條秀太郎の『三味線語り』に、初秋のススキの影がかかる

ぼくには長らく確信してきたことがある。それは、日本人がなによりも親しく味わうべきなのは三味線とその音楽文化だろうということだ。

仏教も神祇も能も歌舞伎も、お茶も花も弓も剣道も知っておいたほうがよいけれど、三味線がもらしてきたものこそ、これからの日本人が取り戻すべき真髄であって、日本人が感じてきた心の響きなのである。このこと、ほぼ信念に近い。

琉球の三線（さんしん）が三味線に生まれ変わり、盲人の検校（けんぎょう）たちによって本手と破手をもつ独特の組歌になっていったのは江戸初期のことだった。たちまち浄瑠璃が誕生して、半太夫節・義太夫節・一中節を生むと、そこから常磐津・豊後・清元・宮園・新内・富本などが次々に派生して、それはそれは微妙な流儀になっていった。切なくて、粋で、官能的だった。そのいずれもが今日なお継承されている三味線音楽なのである。

演奏の合間合間に三味線の調子をととのえる

一方、日本には神謡や和歌に始まり民謡や隆達小唄や数え歌に至る「うた」の伝統がある。そこには江戸の長唄、明治の小唄、昭和の演歌までが入る。これらもその多くが三味線によって伴奏され、三味線によって新作を生んできた。

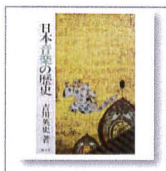
三味線と歌。この組み合わせこそが、日本の風土にも四季にも、日本人の言葉づかいにも喜怒哀楽にも一番ふさわしい。楽器と声の両方が「間」（ま）があらわせるからだ。

初めて本條秀太郎の三味線と声と作曲に接したときは仰天した。感極まった。ああ、これだと思った。ここには三味線と歌の日本文化のすべてが体現されている。それだけではない。本條さんの試みには、日本の過去と未来が、本来と将来がつながっていた。その後、何度もコラボレートするようになって、さらに確信が深まった。本條さんは日本文化の最も大事なことを作って、演じて、伝えることができる稀有なアーティストだということが――。

本條秀太郎

それにしても、なぜ三味線と歌を聴く機会がこんなにも少なくなってしまったのだろうか。これでは日本はすたる。クールジャパンはここに戻るべきだ。なんとしてでも、まずは本條さんの端唄あたりから聴き初めてほしい。加えて、ぼくとしてはさらなる芸者さんの日々の活躍を願いたい。

まつおか・せいごう 編集工学研究所所長・イシス編集学校校長。2014年から本條秀太郎氏と日本の音色を堪能するイベント「三味三昧」を開催。趣向を凝らした格別な演目・室礼・食事で好評を博している。第5回目は11月19日(木)19：00より。近日、申込受付開始。「松岡正剛千夜千冊」(http://1000ya.isis.ne.jp/)



KEY BOOK

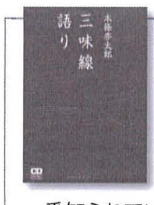
吉川英史『日本音楽の歴史』（創元社）6048円、在庫なし

日本音楽のことを邦楽という。邦楽にはさまざまな混成文化が入りこんでいて、それが紅毛南蛮文化と出会ったのち、江戸社会のなかで純粋発酵していった。その変遷は日本人の最も大切な「感性の歴史」を受け持っている。邦楽には「歌もの」と「語りもの」がある。楽器も琵琶、箏（こと）、鼓、尺八、太鼓などいろいろあるが、そのいずれをも三味線一丁が引き受けることができた。三味線は「日本の声」なのである。

KEY BOOK

田辺尚雄『三味線音楽史』（柏出版）3780円、在庫なし

三味線音楽は八橋検校・石村検校・沢住検校などの盲人アーティストによって組まれ、元禄から天明に向かって爆発的に広まっていった。その劇的な変遷に何があったのかは、本書に詳しい。田辺尚雄は宮城道雄・町田嘉章・4世杵屋佐吉・吉田晴風らとともに「新日本音楽」にとりくんだ。大正8年の『隅田の四季』に始まり昭和に至ったその試みは、今日の本條秀太郎の挑戦につながっている。邦楽文化の普及者としての著作も多い。



KEY BOOK

本條秀太郎『三味線語り』（淡交社）3086円

本條さんの本として一番知られている一冊だ。帯には森繁久弥の「私の口ずさんだ一節が、才人秀太郎の三味の音で冴えわたる」が引かれる。本條さんは端唄の名人としても、俚奏楽の創始者としても、本條會の主宰者としても知られるが、寺山修司詩の作曲、民謡のみごとなアレンジ、細野晴臣らとのコラボ、新作神楽の演出などでも抜群の冴えを発揮してきた。最近はぼくも「三味三昧」を「本楼」で一緒に催して、好きな三味線に耽溺させてもらっている。

KEY BOOK

樋口覚『三絃の誘惑』（人文書院）3132円

「ふるさとのしんむらさきの節恋しかの歌沢の師匠も恋し」。九鬼周造が遊学先のパリで歌沢を偲んで詠んだ一首だ。明治の文人たちは兆民・露伴・鴎外・漱石・鏡花をはじめ、大半が清元・小唄・義太夫・新内・歌沢などにぞっこんだった。本書はその明治の三絃の音に誘惑された文人たちの好みと精神性と時代背景を描いて、まことに申し分ない。日本人が三絃のどこに痺れるのかもわかる。同じ著者の『「の」の音幻論』とともに詠まれるといい。